平成31年度全国学力・学習状況調査の結果を活用した英語に関する調査研究

目的:
- 平成31年度調査の中学校英語のデータを用いて、英語学力の状況および特徴的な結果が見られる学校の指導法や取組等について分析する。
- 高い成果をあげている学校を訪問調査し、その特徴を事例としてまとめる。

分析Ⅰ

(1) 全国的な状況および学力間の関係の分析

英語学力の3つの視点となる技能、言語能力、資質・能力のそれぞれについて全国的な状況を把握するとともに、学力間の相関関係を分析する。

○ 資質・能力では、知識・技能はかなり定着しているが、思考力等は3割程度にとどまっている。
○ 言語能力では、表現の能力、理解の能力ともに5割を下回っており、知識・技能を活用する能力が十分身に付いていない。とりわけ、「話すことは」正答率が3割とかなり低い。
○ 技能間の相関は「書くこと」と他技能間がもっとも高い。教科間では、国語より数学と相関が高い。

表1－1 英語学力の視点ごとの統計量

	全体	資質・能力		言語能力			技能			
		知識技能	思考力等	知識理解	外国語表現	外国語理解	聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと
問題数	26	17	9	17	3	6	7	6	8	5
平均正答数	13.4	10.1	3.3	10.1	0.6	2.7	4.8	3.4	3.7	1.5
平均正答率	51.5	59.4	36.6	59.4	19.4	45.3	68.3	56.2	46.4	30.8
標準偏差	4.6	3.5	1.6	3.5	0.7	1.2	1.2	1.4	2.1	1.2
偏差値変換のSD	17.9	20.4	17.9	20.4	22.1	20.6	17.8	24.1	26.1	24.2

SD:標準偏差

表1－2 技能間の相関

	聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと
聞くこと	1	―	―	―
読むこと	.353**	1	―	―
書くこと	.378**	.531**	1	―
話すこと	.322**	.419**	.502**	1

表1－3 教科間の相関

	英語能力値	話すこと	国語能力値	数学能力値
英語能力値	1	―	―	―
話すこと	.686**	1	―	―
国語能力値	.605**	.358**	1	―
数学能力値	.703**	.423**	.675**	1

(2)調査項目の特性の分析

項目応答理論(正答を1、誤答及び無回答を0とした2パラメータロジスティックモデル)によって分析する

表1－4 英語調査問題の分析結果

問題	正答率	困難度	識別力
大問1	78.8	−2.063	0.967
大問2	72.1	−2.116	0.471
大問3	82.3	−2.467	0.68
大問4	8.3	1.919	1.835
大問5	76.1	−1.169	1.378
大問6	63.6	−0.549	1.385
大問7	33.3	1.322	0.562
大問8	11.5	1.819	1.536
大問9	52.8	−0.142	1.749
大問10	1.9	3.045	1.733
S大問1	32.6	1.86	0.527
S大問2	10.5	1.932	1.488
S大問3	45.8	0.165	1.4

○ 識別力は、0.5を下回る項目が「聞くこと」の大問2にとどまり、マイナス項目はない。
○ 困難度は−3.5から3.5まで幅広い。特に「聞くこと」はほとんどの項目でマイナスとなっている。一方で「書くこと」、「話すこと」では3.0を超えている項目が見られる。
○ 英語能力値の推定においては、左右均等の正規分布となっている。
○ 国語調査と比べると、やや難しく、識別力も低かった。
○ 数学調査と比べると、識別力も困難度もばらつきが大きい。

分析Ⅱ： 生徒を軸とした分析
（1）英語学力と質問紙調査の分析

英語学力（英語IRT能力値）をもとに生徒を3群に分け、それぞれの解答傾向を把握する。さらに、生徒質問紙の回答との関係を分析する。

カテゴリ	基準　SD：標準偏差	
上位群	IRT能力値平均＋1SD以上	生徒質問紙の回答傾向を比較
中位群	IRT能力値平均±1SD未満	
下位群	IRT能力値平均－1SD以下	

○ 下位群の生徒は、知識・技能の定着が、中位群の生徒は、即興でやり取りしたりする技能統合の能力が十分でない。
○ 学力の高い上位群の生徒は、言語活動や課題解決学習を行い、英語の授業では思考力を伴う活動を行ってきている。

英語学力の高い生徒の傾向

・英語や英語学習に対する肯定的な反応（好き、大切だ、将来役立つ、職業選択など）が高い。
・1，2年生のときに受けた英語の授業で、思考力等が必要な活動（概要や要点を捉える、まとまった内容を発表する、考えや気持ちを書くなど）が行われた。
・1，2年生のときに受けた英語の授業で、課題解決や言語活動を含んだ活動が行われた。

（2）解答傾向による生徒のグルーピング

4つの技能（領域）を、「外国語科の捉え（観点：知識・技能と思考力・判断力・表現力）に基づいて8つ（4×2）に区分し、それぞれの解答傾向からクラスター分析により生徒のグルーピングを行った（大問10は正答率が著しく低いので除外した）。

○ 生徒は、解答傾向から6つのクラスター（特徴を持った集団）に分類することができる。
○ クラスター1と3は下位群が多いが、「聞くこと__知識・技能」のみ平均的な生徒グループがある。
○ 中位群が多くを占めるクラスター2、4、6は、「話すこと」で顕著な違いが見られる。「話すこと」が全体に低いのがクラスター2、「話すこと__知識・技能」のみ高いクラスター4、逆にそれが低いのがクラスター6である。

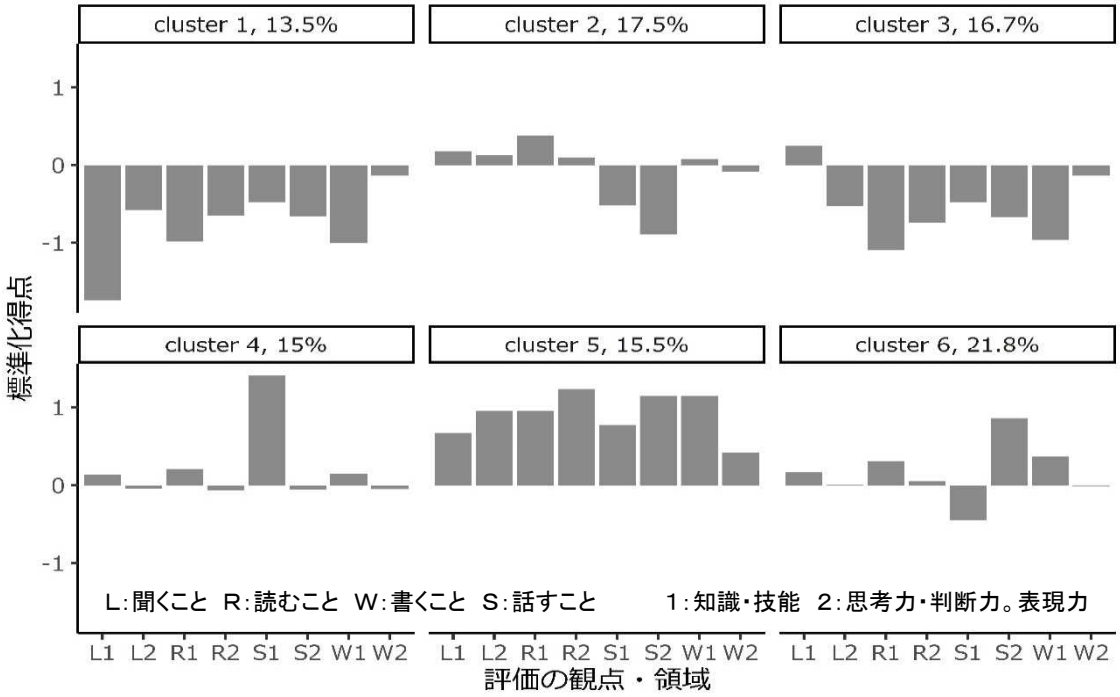

図2－2　各クラスターの8区分の標準得点

分析Ⅲ： 学校を軸とした英語学力と質問紙調査の分析

（1）英語学力と質問紙の関連について、学校レベルでの変動と個人レベルでの変動を分離して分析するために、平成31年度の各学校における就学援助率を加味したマルチレベル分析（ベイズ推定）を実施し、英語学力に影響を及ぼす学校での取組や生徒の認識について検討（次頁図3－2）。

（2）分析の結果、表3－1の赤枠内の数値が示すように、学校レベルにおいて就学援助率を統制しても、生徒質問紙061「1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」から英語学力に対して（学校質問紙051「調査対象学年の生徒に対する英語の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか」よりも大きな）正の影響が認められた。換言すると、就学援助率を統制しても、生徒質問紙によって問うているような1、2年生のときに受けた英語の授業内容について、生徒が肯定的に捉えている生徒が多い学校の方が英語学力も高い傾向にあり、その影響の大きさは就学援助率による負の効果を上回ると考えられる（詳細は報告書に記載）。

（3）マルチレベル分析の結果に基づき、個人の英語学力（IRTスコア：平均100）と生徒質問紙061の回答結果を、生徒が所属する学校の就学援助率別に比較（図3－1）。

表3－1　マルチレベル分析結果：英語学力の変動と質問紙の関連（標準化解）

標準化解 [95%C.I.]	個人レベル		学校（集団）レベル		
	H31英語		変量効果		H31英語
			S1	S2	
生徒質問紙037	0.225 [.223, .227]	S1	—	—	-0.087 [-.115, -.059]
生徒質問紙061	0.210 [.208, .212]	S2	—	—	0.451 [.427, .474]
就学援助率 (学質 006)	—		n.s.	0.074 [.044, .104]	-0.182 [-.196, -.169]
学校質問紙051	—		n.s.	n.s.	0.151 [.137, .165]
R-SQUARE	0.100 [.099, .101]		—	—	0.267 [.245, .290]

生質037：1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか
生質061：1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか
学質051：調査対象学年の生徒に対する英語の指導として，前年度までに，発展的な学習の指導を行いましたか

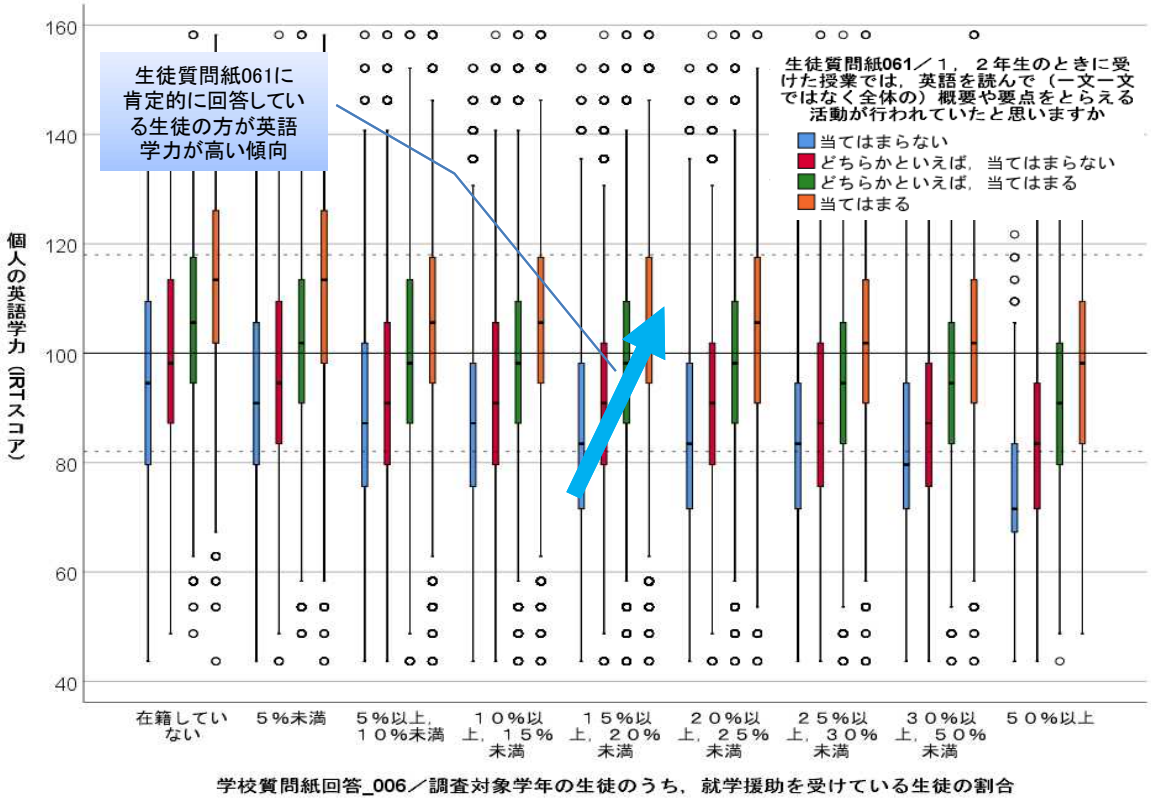

図3－1　箱ひげ図：個人の英語学力（生徒質問紙061×就学援助率）

〇就学援助率別に比較
　就学援助率に関係なく、指導に関する質問項目である生徒質問紙061に対して肯定的に回答している生徒の方が、生徒個人の英語学力が高くなる傾向
　その他、生徒質問紙060「１，２年生のときに受けた授業では，英語を聞いて概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか」など、指導に関する類似項目は同様の傾向を示す

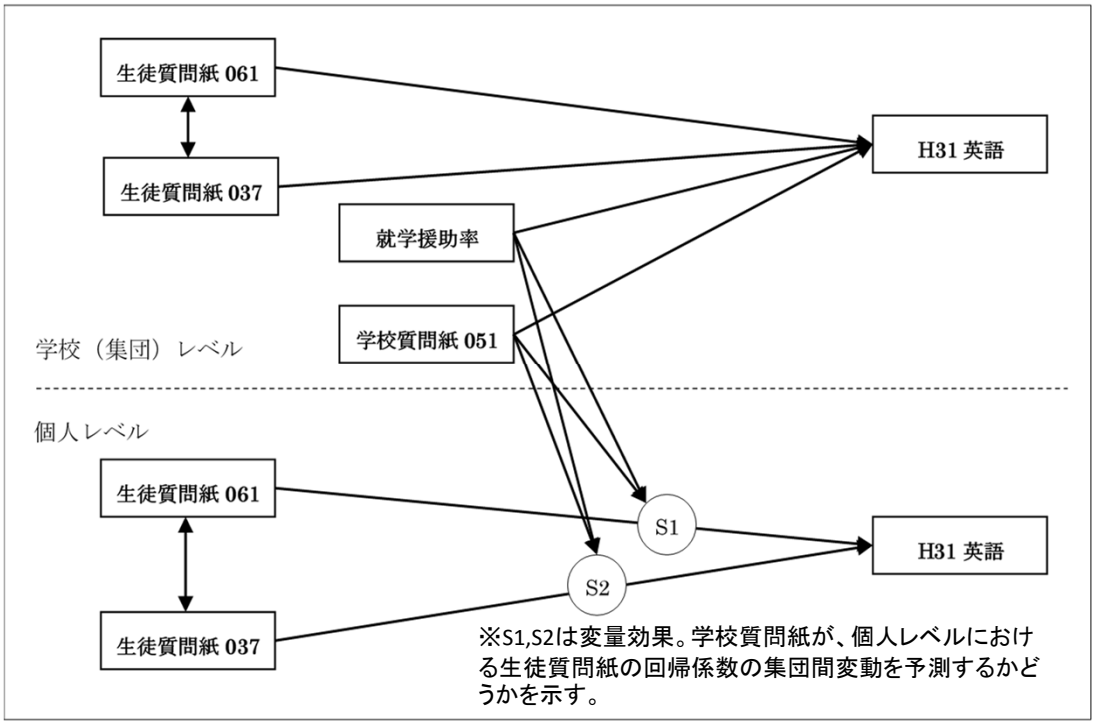

図３－２　マルチレベル分析モデル図

注1：マルチレベル分析は、英語の調査を当日実施した生徒数11名以上の学校と当該校の生徒が対象
注2：図３－１は、英語の調査を当日実施した生徒数11名以上の学校に所属する、全生徒の個人レベルのデータに基づく

分析Ⅳ：　訪問調査

平成３１年度の調査で特色のある成果を出した８中学校、３教育委員会を訪問して分析。

＜学校の取り組み＞
〇 校長のリーダーシップの下で、学校の教育活動全般にわたって思考力や表現力を伸ばす活動が多彩に盛り込まれている。
〇 英語の授業で思考力を伴う言語活動が多く、それが評価にも取り入れられている（パフォーマンス評価）。
〇 単元内にとどまらず、他の場面で活用できる英語学力を付けている。

学校全体での思考力や表現力を伸ばす活動の例

・朝礼や朝の会でのスピーチ
・委員会活動のわかりやすい掲示
・学年を超えた生徒でのグループ討議
・学校行事を振り返り発表

学力を付ける英語指導の例

・考えを持たせて発表する。
・比較という思考スキルを用いてスピーチを分析する。
・説明することで自分の知識を高める。
・少人数クラスよりも1クラスを2人の教師で指導する。

＜教育委員会の取り組み＞
〇 体系的な外国語教育推進体制が構築されている。
〇 教員の研修会組織を積極的に支援している。
〇 地域で指導や評価に関する意識の統一が図られている。